



「浩々洞」時代の暁烏敏師(中央)。向かって右は佐々木月樵師。左は多田鼎師。

届を出し、宣誓書を発表する。「同年11・11 真宗大学にて、舟橋水哉寺本婉雅・暁烏敏・多田鼎・山田月樵ら、研究科および本科生100人退学となる。」と記されている。翌年復学し1900(明治33)年真宗大学寮を卒業。東本願寺留学生として東京外语大学露語別科に入學。二葉亭四迷に教わるも中退し、同年9月清沢満之主宰の浩々洞に入り、翌年『精神界』の刊行を発案、同人らと共に発刊する。

1903(明治36)年6月6日清沢満之示寂、41歳の若さであった。前日に危篤の報を受け取った暁烏師は、その日の事を「6月6日 晴 午前四時刈谷着。車なし。五時車来る。大浜に入る。途中案ぜられて車遅き思ひ、西方寺に入る。午前七時半。先生既に寂せられぬときくの驚き。今朝午前一時に寂を示さる。あゝ。直ちに骸の側に行く。涙下りて止まず。(中略) 何れますます欣浄の念にたへず。(略)『暁烏敏全集』と

日記に記している。清沢満之亡き後浩々洞の代表となる。その時師は26歳であった。師の年表をたどると、この年より『精神界』をはじめ、精力的に執筆並びに講話活動がなされていることが伺える。『仏教之信仰』『迷の跡』『死の問題』『すくひの話』『仏教入門』そして1911(明治44)年4月10日親鸞聖人650回大遠忌を記念して『歎異抄講話』を刊行した。

しかし、1915(大正4)年4月に浩々洞の代表を辞任し、北安田の明達寺に帰坊した。残念ながら辞任した理由を師の年表や日記で伺い知ることが出来ない。1917(大正6)年2月『精神界』2月号より浩々洞の名前は消え、これより『精神界』に関するものは皆我量深師宅の編纂所にて行われることとなり、浩々洞は事実上消滅していく。しかし、師はその後「暁烏師が

47歳を迎えていた1924(大正13)年1月には、最愛の母千代のが76歳で亡くなる。母を亡くした頃の師は、日本の伝統精神の研究に没頭し、特に聖徳太子の著作などの研究を深めている。さらに師は、49歳の頃に仏蹟巡拝としてインドへ赴き、以降も中東・エジプトの聖地巡礼やヨーロッパ旅行、52歳の頃にはハワイ・アメリカへ講演旅行をするなど、国内のみならず海外へも精力的に足を運んでいる。また、執筆活動にも力を注ぎ、師の主宰した月刊誌『願慧』の発行部数は、約1万部にもおよんでいる。1936(昭和11)年暁烏師が59歳の時には秩尊をはじめ親鸞聖人、聖徳太子、清沢満之などへの報恩謝徳のため、明達寺で大報恩会を一週間にわたり勤め、参詣者は数万人にもおよんだと伝えられている」と『南御堂』(2006年8月1日)に記されている。

(つづく)

御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」
教区御遠忌テーマ「あなたは、与えられたいのちとどう向き合う？」

教化本部通信 【第46回】

真宗門徒の生活 朝夕におつとめをしましょう・声にだしてお念仏を申しましょう
を回復しよう すすんでお寺の法座に身を運びましょう・報恩講を大切にお迎えしましょう

真宗同朋会運動50年に向け、運動の「興り」について再検証を行う。今号からは、真宗同朋会運動の基盤となった「同朋生活運動」を提唱し、念仏総長と称された暁烏敏師の歩みについて掲載する。

また今回の「点描」は、1964年(昭和39)から北海道教区において展開された「特別伝道」について掲載する。

真宗同朋会運動50年に向けて

その検証 興り(七)

念仏総長と称された暁烏敏師 (その1)

教化本部 古卿 誠幸

真宗同朋会運動の興りを検証するうえで、その運動の基盤となった「同朋生活運動」を提唱し、念仏総長と称され明治・大正・昭和の3時代を生きてこられた暁烏敏師の歩みを訪ねてみたい。師は、1877(明治10)年7月12日、石川県石川郡出城村字北安田(現・白山市)明達寺の長子として誕生した。17歳の時京都大谷尋常中学校(現・大谷高等学校)の3年に編入し、校長であった清沢満之と出会う。その時、清沢満之31歳であった。翌年には後の「浩々洞」において三羽鳥と称される佐々木月樵、多田鼎と同窓と

なる。京都真宗大学寮に進学した師は、清沢満之、今川覚神、稲葉昌丸らの宗門改革運動に傾倒していた。後に師は「今川、稲葉、清沢の三師は、敏に対しては同体三面の善知識也。今川先生の感化、稲葉先生の薫陶、清沢先生の人格、この三者は傲慢不遜の青年の首を下げるを得ざらしめ、最後に清沢先生を信の師と仰ぐに至りて」『精神界』と回顧している。『近代大谷派年表』(教学研究所編)には「1896(明治29)年11・4 清沢満之らの改革派に呼応して、真宗大学生ら決起し全員休校